

愛犬飼育のノーハウいろいろ

NO 1

獣医師 荻野 晃

本号から編集者のご好意により市井の一獣医の、愛犬家の皆様への提言やら解説やらを載せていただくことになりました。

浅学非才の身ではありますが、永い経験からの、それなりの知識をお話ししたいと思えます。どうしても硬い表現になり、退屈なお話しになってしまうこともあるかもしれませんが、どうぞおつききらい下さい。



やはり順序として、恐ろしい病気のことからお話ししたいと思います。
思えます。

子犬は生まれてから五十日目前後になると母犬から受け継い

だいろいろの感染症に対する免疫力が徐々に弱くなってきて、七十日目にはほとんどの子犬の免疫力が消失してしまいます。これは親自身が持っている免疫の強さによって左右されるもので、非常に不安定で個体差のあるものです。

このため専門業者などでさえ、魔の五十日と言って恐れておられます。

これに加えて、この時期は腸内寄生虫が急に増殖して徐々に障害を現してくる時期です。その種類は、回虫、鉤虫、鞭虫（十二指腸虫）、条虫（さなだむし）などがもつとも普通に見られ、その被害は非常に恐ろしい症状を現します。

このほか、野鳥や鶏などの糞から感染するコクジューム原虫や糞桿虫、肺虫など比較的少ないものを挙げれば二十種類以上が数えられます。

この寄生虫類は母犬の胎内での胎内感染で、日頃健康そうに

見える母親でも、鏡検して陰性の場合でも、不顕性に寄生していることも多いので、事実上ほとんどの子犬が親から虫を貰って生まれてくることになります。

私どもは、生後二十五日目になると様子を見ながら駆虫をしてゆきます。寄生の状態によりそれから十二日目くらいに二度目の駆虫を行います。状況によっては三回目を五十日目前後に行います。成長してからは戸外の散歩、運動などで足の裏側、趾球部の汗腺孔などから土中で成育した寄生虫の幼虫が侵入して血流にのり、次第に胃や腸に寄生し、繁殖してゆくことになります。新生仔の場合、これらの腸内寄生虫で死亡する例は非常に多く、特に屋外犬の場合は、飼い主が基本的な処置を怠ったために八頭生まれた仔犬が、次々に六頭も死んでしまったこともあります。これは七十五%の死亡率と言うことになり、原因は十二指腸虫症でした。

すべての病気には必ず原因があります。貴方の愛犬を不孝な病気に犯させないためには、愛情のこもった観察と、正しい予防と、健康のための努力研究が必要だと思えます。

さて、これからいろいろの感染症についての解説をお話してまいります。

感染症で恐ろしいのはウイルスに因る伝染病です。一旦感染したら懸命の治療も全くと言ってよいほど効果がなく、犬は死への転帰をとります。最近では次々と有効なワクチンが開発されて強力な味方ができたと言ってよいでしょう。願わくは正しい方法によるワクチン接種を行って、新しい家族の一員であるワンちゃんを強い健康な犬に育てましょう。

仔犬に対する予防接種はいつ頃がよいかですが、これはなかなか難しい点があります。

母犬から貰ってきた免疫力は、生後五十日から七十五日くらいまで維持されます。ここに問題が生じるわけで、先天免疫が残っている状態でワクチン接種を行いますと、 $1-1=0$ となってしまうって効果が全く消えてしまいます。しかし、前述のごとく五十日くらいから感染の危険がありますので、この時期は戸外へ出すことは一切避け、家人も余所の犬との接触を避けて、ましてや、ペットショップなどで犬を撫でてくるようなことは

敵に慎まなければなりません。余所の犬を触ってきて、その手で我が家の愛犬を愛撫して、病気を移してしまうことがあります。す。いわゆる間接感染です。気をつけて載きたいと思いません。

生後七十五日位になったら予防接種の適期です。体調を万全にしておいて接種を受けましょう。医師によってプログラムはいろいろですが、私は五種混合ワクチンを接種しています。

寄生虫の寄生がありますと免疫抗体の産生が弱く完全となりませんので、事前からワクチンと同時に駆虫を行うことが望まれます。

ワクチンを接種してからも、まあ一安心と言う訳にはまいりません。

普通で二週間は絶対外出禁止とし、入浴洗体も禁止とします。何故ならばワクチンの発効以前に風邪をひいたり、感染したりすると命取りとなるからです。この事例は珍しいことではなく、ペットショップで仔犬を買って、その足で獣医科を訪ねワクチン注射を受けたとします。これは非常に危険なことで、店にいる期間に既になんらかの病気に感染していて、現在潜伏

期寒中かも知れませんが。この状態で各種ワクチン接種を行うと、すぐに潜在していた病気に感染した状態となり、確実に症状が発頭することになります。この危険な状態は、獣医が丁寧に診察しても発見することはできないと思われれます。このようなハプニングを避けるには新しい飼い主宅に行ってから、前に述べたように外出禁止、寒さを避け、決めた食事以外は絶対に与えずに、すべての事柄に気を配って最高の健康状態を保つようにして、七日から十日間を観察します。ほとんどの感染症は潜伏期間が三日から五日ですから、十日たてばまず大丈夫です。信用できる獣医師を選んで予防接種を受けましょう。

前置きが長くなりましたが、次に感染症の種類や病状について説明いたします。

- (1)ジステンパー症
- (2)伝染性肝臓炎
- (3)犬パルボ腸炎
- (4)レプトスピラ症
- (5)パラ・インフルエンザ症

(6) 狂犬病

ジフテリアンパー症

犬を飼ったことのある方の中には、知らなかったためにこの病気で悲しい経験をお持ちの方も多いと思います。

ご存じのようにこの病気は、非常に悲惨な結末に終わる、ウイルス起因の伝染病です。その伝染力は凄まじいといしか言い様のないもので、一度発生すればその近隣の未処置の犬は例外なく感染すると言っても過言ではありません。初期の症候としては軽い咳から始まり、鼻水、目やにが目立ってきます。この時期が過ぎると体温が三十九・五度から四十度に上昇してきます。この頃には既に下痢が始まり、水様便の激しい悪臭に悩まされます。鼻水はますます濃くなって泥っばとなり、下痢は血便となりトマトケチャップ様になってきます。こうなると予後は悲しいことに、ほとんど決定的に絶望と言わざるを得ません。わずかに生物的製剤（DH血清・多価血清・乾燥ブラスマなど）が偉効をあらわし、まことに強い味方なのですが残念ながら現在は全く手に入りません。全部が輸入品で、何故か全く

供給が止まっております。

それでも我々はあらゆる処置をして治療するのですが、下痢はますますひどく、食欲は全く廃絶し、見るかげもなく痩せ衰えてきます。ひどいことにこの時期にいろいろの薬品に追い詰められたウイルスが血流が一番少ないため薬効が届かない脳組織に侵入します。当然そこで炎症が起きて神経症が発生します。これが飼い主には一番辛い症状となってきます。犬は最初、眼の上縁や耳の付近に、びくびくと小さな痙攣を起こします。それが瞬く間に段々に拡がってゆき、前肢、後肢ともに丁度横になったまま駆け足をしている様に、痙攣が拡がってきます。狂奔型ともなると、ぐったりと横になっていた犬が急にむっくり起き上がると、真っすぐ前に駆け出します。そして、壁に衝突して転倒しますが、また、むっくり立ち上がると今度は反対方向に走りだし、また、壁にぶつかり倒れます。これは本当に見るに耐えない光景です。これを繰り返しながら数時間経過すると犬は衰弱の極みに達して、あとは苦しそうに呻くだけとなります。ここまできると、後は苦痛から開放してやるた

めに安楽死させるといふ選択しかありません。

この犬の排泄物、糞便はもちろん、尿や鼻水の汚れ、唾液の汚染など、すべてが感染源となり、免疫のない犬の場合すぐに感染してしまうと思わねばなりません。普通の場合この伝染力は約三か月持続します。確実な殺菌効果のある薬品はまだ開発されていません。むしろ敷物や器具ならば洗剤などでよく清拭して直射日光によく晒す事の方が、効果がよい様に思われます。

ジステンパーワクチンの種類類と解説

(1)ジステンパー一種ワクチン

(2)二種混合ワクチンヘジステンパー症、伝染性肝炎の混合ワクチン

(3)三種混合ワクチンヘジステンパー、伝染性肝炎、犬パルボ

腸炎の混合ワクチン

(4)四種混合ワクチンヘジステンパー、伝染性肝炎、カニコ

ラ型レプトスピラ症、黄疸出血型レプトスピラ症

(5)五種混合ワクチンヘジステンパー、伝染性肝炎、レプトス

ピラ症二種類、パルボ腸炎

(6)七種混合ワクチンヘジステンパー、伝染性肝炎、レプトス

ピラ症二種類、パルボ腸炎、犬パライ

フルエンザ、犬アデノウイルス症

(7)狂犬病ワクチンヘ狂犬病

一般に接種されているワクチンは上記の種類に要約されま
す。世界各国の製薬会社や研究所がその国に適した株を培養し
て、製造しており、それぞれ特徴をもっております。我が国で
も数社が開発、研究の上で独自のワクチンを製造しておりま
す。ジステンパー症に関してはひとまずこの位にして、次に
進めてまいります。

伝染性肝炎

このウイルス感染症は思ったより広く分布していて、問題な
のはウイルスを持っていても表面上は健康的な日常を過ごして
いて、いわゆる保菌犬が多いと言うことと、一般の飼い主達が
この病気のことをご存じないという点が、この病気を絶滅でき

ない理由です。

沢山生まれた仔犬が、白っぽい下痢がある程度で、他には目立つ症状はないのに犬はめきめきと弱ってゆき、遂には死亡します。

この病気の場合、ジステンパーなどと混合感染していることがほとんどなので、この病気の特徴が特定できないことが多いのです。

犬アデノウイルスには一型と二型とがあり、一型は仔犬の突然死や肝臓の劇痛、頑固な下痢、扁桃の腫脹や、角膜の白濁を生ずる犬伝染性肝炎の原因となります。二型は気管支炎や肺炎、扁桃炎など、呼吸器病を起こします。

仔犬がこのウイルスの侵襲を受けると、潜伏期約五日程で先ず体温上昇（四十〜四十一度）がみられ、この頃から肝臓の病変があらわれ、触診により肝の部分の硬く拡張しているのが認められ、指圧により痛みを訴えます。血液の凝固作用が徐々に低下してゆきます。

急性の場合は、発熱から数日で衰弱して死亡します。経過は

著しく急で、昼までは元気で食欲にも異常がなかったのに、夕方からやや様子が変わり、どうかしたのかな？と思っっていると、翌朝、突然死んでいるのを発見したと言う例が度々あります。呼ばれた獣医も手の施しようもないと言う事例です。

運良く慢性型であった時は、初期の発熱が三十九・五度位で高熱までは上がらず、ただ、時々ヒステリー症状を呈することくらいで、間もなくそれも治まるが、なかには両眼に角膜炎を起こして表面が真っ白に濁り、びっくりした飼い主が眼の病気だと思って慌てて連れて見せることもあります。これも数日で、無処置でも消失します。

今回はこれで終わりますが、次号では今もつとも被害の激しいパルボ腸炎についてお話ししたいと思います。お待ちしております。